

リニューアルオープンに際して

佐々田 亨 三*

1. はじめに

平成16年4月29日、開館を祝う連風が晴れ渡った博物館の上空を舞っている中、午前9時30分リニューアルオープンの宣言とともに大きくす玉が割られ、待ちに待った来館者が入場した。昭和50年5月の創設以来の改修で、平成14、15年度の2カ年を要した本館部分の機械・電気棟の増移築、参加体験型「わくわくたんけん室」、ミュージアムショップ等の新設、天井・壁面等の改修をするなど展示スペースが約2倍となった「企画展示室」、それに原資料を中心として総入れ替えをした「人文展示室」と「自然展示室」、単なるリニューアルではない大改修である。展示資料も従来の5倍を数え、まさに秋田の文化・生涯学習の拠点、新生秋田県立博物館の誕生である。なお、前日の28日には秋田県知事、県議会議長、県教育委員長はじめ関係者の臨席のもとリニューアルオープン記念式典を挙行し、各展示室を内覧、また、その前の20日には新聞・テレビ等のマスコミや教育委員会関係者に内覧の機会を設定し、最終調整をして29日のオープンに備えたのである。ここにニューミュージアムプラン21（以下NMP21とする）検討委員会をはじめ、県議会、教育公安委員会（平成15年10月21日には県内調査で来館）、秋田県立博物館協議会、県教育委員会等の指導の賜であることを付記し、感謝するものである。ここではリニューアルオープンまでの経緯を報告するとともに、昭和50年の創設以後の館員による博物館構想やその議論、改編プラン（「プログラム試案」と呼称）を紐解き、それがNMP21検討委員会で提案された「目指す県立博物館像」や「基本方針」にもふれてみたい。

2. リニューアルまでの経緯

ここでは、総合博物館としての創設・誕生からリニューアルオープン・博物館構想の実現までの議論やプログラム試案等を含めた経緯を略述する。

秋田県立博物館は「秋田学」を標榜し、歴史、考古、民俗、生物、地質、美術、工芸の7部門を備え、秋田の自然、歴史、文化を広く学習できる総合博物館として昭和50年5月に、また、重要文化財旧奈良家住宅は分館として誕生・開館した。自然と人文とを兼ね備えた県立の総合博物館としての創設は東北でも早いほうで参考にされることが多かったがその一方、年と共に博物館機能の拡大や改善・改修等が求められていた。

(1) 改修の高まりとその議論

平成に入ると、改修等についての関心が高まり、平成3年には人文展示室の展示内容について議論されている。これら議論の中で、常に問われていたことは地方博物館として、しかも県立博物館として、「秋田とは何か、秋田とはどのようなものなのか、秋田はどこにこうとしているのかについて展示資料や展示内容にみられるのか」ということであった。これらの議論については誕生以来「研究の総合化と秋田という郷土学の体系化」を活動の基盤として、調査研究・展示・教育普及活動を実践してきたところである。また、県内ではこれら一つ一つの課題にこたえるべく研究・普及活動を図るため、仙北町に県埋蔵文化財センター、大曲市に農業科学館（平成3年）、横手市に近代美術館（平成9年；当館の絵画等移設）が次々と創設されている。

*秋田県立博物館

(2) 「秋田の先覚記念室」、 「菅江真澄資料センター」の創設

平成8年には、いわゆる近現代に秋田を舞台にあるいは秋田県出身者として全国的に活躍した先人を顕彰する「秋田の先覚記念室」を、また、秋田を旅し、秋田で生涯を終えた菅江真澄の業績等を展示及び研究拠点とする「菅江真澄資料センター」を増設した。

(3) 社会状況の変化と価値観の多様化・ 県民のニーズの多様化への対応

しかしながら時代は国際化、情報化及び高齢化、科学技術の進歩と産業構造の変化、それらによって生ずる価値観の変化等、今までに経験したことのない社会の変化、ないしは社会が進展する中で、入館者数は平成に入って3年の7万人をピークに年々減少の一途を辿り、3万人台に落ち込むこともあった。そのため、博物館にとっては県民しかも入館者のニーズの多様化にいかに対応かが急務な課題であった。

(4) 21世紀の展望と具体的な改編プラン

そこで博物館では来るべく21世紀を次のように展望し、館内で具体的な議論や提案をしている。まず、予想される社会を文化行政に視点を置いて捉えなおし、「豊かな心の時代」(ものから心へ)、「質の時代」(量から質へ)、「個の時代」(集団から個へ)、「創造の時代」(模倣から創造へ)、「発信の時代」(受信から発信へ)、「参加体験の時代」(座学・見学から参加体験へ)に大きく変化していくと捉え、平成3年改編プランとして「NMP21アクションプログラム試案」(「プログラム試案」)として提案している。要約すると、

- ①県内の文化・生涯学習施設のセンター館機能
- ②高次の総合博物館
- ③キーワードは「参加・体験」、「フレキシブル」、「アミューズメント」
- ④本物を観る感動(ハンズオン・触る感激、嗅ぐ・聞く等五感の活用)
- ⑤マルチメディア・レファレンス・情報の取得・疑問解消
- ⑥ミュージアムショップ・レストラン・小泉湯・

水心苑・買い物の楽しさ・くつろぎ・爽快感等
具体的には、次の三点を構想している。

- a. 参加・体験が容易にできるフレキシブルな機構への改編
- b. 秋田の過去・現在・未来を多面的、重層的に表現し、容易に理解でき、かつ興味深い展示への改編
- c. 老朽化した施設設備及び必要施設の付加等のハードの整備

ここで注目されるのは、本県のセンター館としての役割と責任、参加体験への取り組み、秋田を多面的・重層的に表現し、分かりやすく、興味深い展示への改編を構想していることである。

(5) NMP21の設置

館としての博物館構想・議論・提案がようやく議題に上り、日の目を見ることになる。平成9年8月にNMP21検討委員会が設置されリニューアル事業が本格化したのである。委員長には岡田茂弘 国立歴史民俗博物館教授、委員に 佐々木潤之介 早稲田大学教授、山下治子 ミュゼ編集長、布谷知夫 滋賀県立琵琶湖博物館総括学芸員、松島義章 神奈川県生命の星・地球博物館学芸部長、高田順 秋田市立築山小学校長、亀沢修 小坂町立総合博物館郷土館学芸員を委嘱し、提案・議論・意見・審議等を重ねてもらい、以下のような構想のもと事業が展開され、オープンを迎えるのである。

NMP21のもと目指す県立博物館像や具体的なリニューアルの基本方針が次のように立てられた。

A. 目指す県立博物館像

- ①秋田の地域性を生かした総合博物館
- ②地域文化の伝承と創造の核となる博物館(ふるさと教育に対応)
- ③学習の場を創造する博物館(セカンドスクール、総合的な学習に対応)
- ④県民と一体となった魅力的で活力ある博物館(県民参加型の施設)

B. 具体的なリニューアルの基本方針

- ①郷土を知る手掛かりの豊富な博物館一ふるさ

と秋田の暮らしと自然を中心とした探求型の展示

- ②利用しやすい博物館—来館者の興味・関心に
応え得る効果的なサービスの充実
- ③交流のできる博物館—見る・触れる・聞く・
考える・参加することを通じて共に学びあえ
る施設をめざした機能の充実
- ④地域文化の理解をとおして世界に視野が広が
る博物館—秋田から日本そして世界への情報
発信

ここで注目されるのは、まず目指す県立博物館像は「地域文化の伝承、学習の場、県民と一体」ということである。ふるさと教育、総合的な学習、セカンドスクールへの対応、しかも県民参加型を標榜し、教育普及活動を重要視している。基本方針についても、探求型の展示、来館者の興味・関心、交流のできる博物館等々を掲げ、来館者へのサービス、来館者主体の博物館構想を前面に出している。前述の「試案」には教育普及活動については多くを掲げていない。しかし、「本県生涯学習施設のセンター館として、秋田を多面的、重層的に表現し、容易に理解でき、かつ興味深い展示への改編」を掲げていることは、教育活動への取り組みということで根本的に大きな共通点を見出すことができる。博物館としての、資料の収集・保管・管理等の本質的な部分を併せ持つ教育普及活動に改めて積極的に取り組む必要が内外から求められていたのである。こうした動きの中でいよいよ事業に着手、およそ5年の歳月を要しオープンとなるのである。その概要を次に掲げる。

(6) NMP21事業概要

平成11年9月 NMP21基本設計着手（～12年3月完成）

平成12年8月同プラン21実施設計着手（～13年5月完成）

平成14年4月同プラン21改修工事開始（～16年3月完成）

ここで改修工事について具体的に述べると、

①工事概要

工期 平成14年3月5日～平成15年10月31日

引き渡し 平成15年10月6日

- a. 機械室増築（旧機械室を自然展示室へ改装）
新たな機械棟を増築して空調設備等の更新
- b. 電気室・自家発電室の移設（増築機械棟への移設で、調査研究・準備室等が拡張）
- c. 情報レファレンスコーナー、ミュージアムショップ、救護室、母子室の新設、ホールのスロープ手すり部・柱に秋田杉を活用

②展示室概要

展示製作委託期間 平成14年3月19日～平成16年3月10日（15年10月展示作業）

- a. 参加体験型：わくわくたんけん室の新設（旧第三展示室を改修、333㎡）常設展示の展示資料等とリンクしたアイテムの宝箱を持ち出して学習・体験
- b. 「人文展示室」（旧第一展示室の改修、1037㎡）、
「人とくらし」をテーマに、実物資料、原寸大の復元資料、町人社会などの庶民の生き生きとした姿を表現する資料を展示、また、適宜展示替え可能なスペースを新設
- c. 「自然展示室」（旧機械室の改修、600㎡）、
「いのちの詩」（動植物）、「大地の記憶」（地質）の二つのコーナーで豊富な秋田の自然・秋田の生物の多様性を表現
- d. 「企画展示室」（旧第二展示室の改修、691㎡）、
天井や壁面の改修により展示スペースが従来の約二倍となり国宝級の展示も可能

各展示室が新設・改修されるとともに、展示作業が進むわけであるが、試行錯誤の部分、再構成・再挑戦の部分等の困難を克服して博物館構想の実現に向かい、ついにオープンの運びとなったのである。

3. 博物館の在り方を求めて

リニューアルオープンして以来、展示替えの意味、また、展示資料を来館者にどう理解してもらっているのか、リニューアルの願いや構想が来館者に果たして伝わっているのだろうか等々、これらの課題に対しては常に博物館がその展示等の妥当性について議論し、改善を重ねていかなければならない。ここでは展示資料についてその指標とでも言うべき考え方に触れてみたい。

(1) 来館者が資料に語りかけ可能な展示

博物館の生命は展示資料であることは論を待たない。ただその資料は現物・原資料・一次資料から、レプリカ、写真、解説文、そして写真・解説等のグラフィック、パネルと様々である。このことは至極当然のことであって、どの段階の資料であるから、どうのこうのということは問題ではない。博物館としての方針やねらい、収集資料の価値や量的なもの、さらには各分野・領域等によっても資料に対する考え方が違うからである。今回のリニューアルでは「展示資料が来館者に語る、同時に来館者が感動し、無限の創造力を発揮して読み・考え、資料に無限大の広がりをもたせることができる」という考えを基本に、可能な限り現物・原資料・一次資料を展示したところである。一般的な例であるが、一定の物語風・ストーリーに「資料」を位置付けるのではない。来館者が現物資料に接し、かかわることによって、来館者なりの世界が開けていくものと確信しているからである。前記した博物館の21世紀の展望と具体的な改編プランの「創造の時代、発信の時代、そして本物を観る感動」はまさにこれらの展示に対する考え方から言えることである。

(2) 博物館の総力が求められる企画展

博物館が一丸となって取り組む必要のある企画展について言及したい。これは常設展とは違いその時代の博物館職員の問題意識と密接にかかわっている。いわば博物館の目玉である。当館の展示の歴史的な歩みから言っても、県民への大きな研究のアピールでもあり、県民への博物館の力量発揮でもある。実際当館の実態を見ると、テーマ展「菅江真澄と秋田の風土」、地域展「鳥海山麓－山と人－」、「湯沢、雄勝の文物展」、東北展「出羽の近世大名」、北東北三県共同展「描かれた北東北」等々を実施している。

これらの展示は各分野からの調査研究なしには実現不可能なものであるが故にまさに、ふるさと秋田の暮らしと自然を中心とした探求型の展示と言えよう。リニューアルの基本方針の一つには「郷土を知る手がかり」のことが掲げられ、プログラム試案と共通する目標である。企画展に関し

ては今や研究があまりに個別化・専門化し、多面的・重層的に取り組み得ない現状に鑑み、担当だけでなく学芸員がチームを組んで取り組むことが必要である。さらに、大きな共通点・目標の教育普及活動をどう進めるかは大きな課題である。そこでまず研究の組織化を図る必要がある。例えば、プロデュース－調査研究－展示作業－ギャラリートーク－博物館教室・学習会の主催等々のスタイルを是非確立したいものである。この組織の中にボランティアとの連携が考えられよう。ところでこれらの実践の一つの例を博物館教育学にみて、今後の活動の参考にしたい。

(3) 博物館教育学の推進

博物館における教育普及活動の例を、1930年代を中心に活躍したベルリンの国立ドイツ民俗学博物館「学校と博物館」部長のライヒヴァインの博物館教育学にみることができる。彼は博物館教育学を実践的に検証し、発展させている。「博物館の具体的な収集品は授業の中に観察の世界として、提示されるべきである」、「観察を通じて概念の獲得がなされるように教師が生徒たちを指導すべきである」と主張し、「教養の場、教育の場としての博物館」、学校教育の「観察と学習の場」という博物館教育学を提唱している。たとえば企画展「陶土と陶工」の開催時には、ただ単に展示・説明するだけでなく、それを青少年の歴史認識や美的能力、経済的な思考を実際に深める教育活動を展開している。「農民焼き物作り」、「ろくろを回す手」の映画を製作するとともに、これらの背景となっている歴史学習や美的技能的な能力を高める実践を自ら行っているのである。企画展にどうとりくむか、展示資料をどのように教育普及活動に組み込み、プログラム試案や目指す県立博物館像に組織的に応えていく場合の一つの糸口にしたいものである。

参考文献

ウィルリヒ・アムルンク著 対尾・佐藤訳
1996『反ナチ 抵抗の教育者』昭和堂
大堀他編 1996『ミュージアム・マネジメント』
東京堂出版